

しら と ま つ き ち

# 白土松吉

さつまいも<sup>ぞうさん こうろう</sup>増産の功労者 ひたちなか市・那珂市



(『わが郷土』より転載)

明治14年(1881) - 昭和31年(1956)。三反田村〔ひたちなか市〕生まれ。幼いころから農業に熱心に取り組み、県農事講習所を卒業後県立農学校〔水戸農高〕に入学。卒業後、県農事試験場の技手となるが2年で退職。明治42年(1909)に那珂郡役所の技手となり、併せて郡農会の技手も務め、農業の改良に着手する。さつまいもの増産をめざし研究に打ち込んだ結果、昭和元年(1926)、一反あたり千貫の収穫に成功。同12年(1937)には、安定した収穫ができる「一千貫獲り白土式甘藷栽培法」を完成させる。食糧増産態勢の折、画期的な技術として全国に広まる。第二次世界大戦後もさつまいもの研究を続け、昭和30年(1955)には黄綬褒章を受章。

白土松吉は、那珂郡三反田村〔ひたちなか市〕に打越家の二男として生まれました。後に湊町〔ひたちなか市〕の白土家の養子となり、小さい時から農業に熱心に取り組み、農業の改良に力を尽くしました。松吉が生まれたころのこの地方の農業というと、陸稲を中心に畑作が行われていました。しかし、陸稲は干ばつに弱く、農家の収入は安定しませんでした。

(農家の不安をとりのぞくには、干ばつにも強いさつまいもだ。さつまいもがたくさん収穫できれば、農家の収入も安定するはずだ。)と松吉は強く思いました。

それからの松吉は、あけてもくれても、さつまいものことばかり。そのころ、一反<10アール>あたり、400貫<およそ1,500キロ>収穫できれば、農家は大喜びした時代でした。ところが松吉は、(一反あたり、1,000貫のさつまいもを作ってみせる。ぜったいに作るんだ。)と今までの倍以上の収穫ができるように目標をたてて、研究を始めたのです。農家の人たちは、今までの倍以上の収穫などできるわけがないと、冷やかな目で松吉の研究を見ていました。

研究を始めて15年目の昭和元年(1926)、ついに一反あたり、1,000貫の収穫に成功します。松吉の栽培方法の特徴は、高いうねを作り、長い苗の両はじを地面の上に出して植えるというもので、これを「ブランコ植え」と名づけました。地中でまるで子どもがブランコに乗っているように、いもが鈴なりになるというわけです。

松吉は研究だけではなく、実際にこの栽培方法をやらせようと、農家に教えていきますが、なかなか収穫が安定せず、途中で何度もあきらめかけます。しかし、農家の人たちが自分の考えた栽培方法に一生懸命取り組んでくれて



さつまいも畑 (ひたちなか市)

いる姿を見ると勇気づけられ、さらに改良を重ねていきます。研究開始から30年近くたった昭和12年(1937)、やっと安定した収穫ができるようになりました。ついに「白土式甘藷栽培法」が完成したのです。

その後、太平洋戦争が激しくなってきた時期になると、米の代わりに食糧として、またアルコールの原料として、この地方ではさつまいも栽培がどんどん広がりました。

「白土式甘藷栽培法」を完成させた松吉のさつまいもに対する情熱はますます盛んになり、さつまいもの栽培技術の向上に努めます。

(さつまいもをもっとたくさん収穫できるようにするためには…)

松吉は、研究に集中するあまり身なりは一切かまわず、はだしで自転車にまたがり、那珂郡の農村をまわり、自分の栽培方法を広めていきます。農民たちは、酒好きの松吉のために酒の席をもうけ歓迎しました。戦争が終わると、松吉の弟子たちがお金を集めて、松吉のために芳野村〔那珂市〕に「白土甘藷研究所」をつくり、松吉は亡くなるまでここでさつまいもの研究に力を注ぎました。さつまいもの増産に生涯をささげた松吉は、地元の人々から「さつまいもの神様」といわれるようになります。

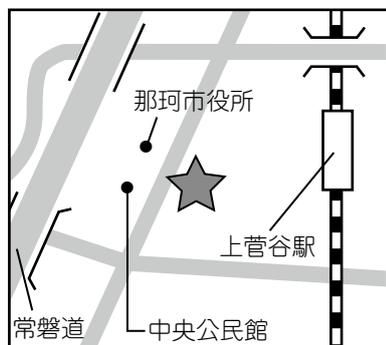
現在、ひたちなか市・那珂市のあたりは、日本で有数のさつまいもの産地となっていますが、さつまいもを原料として干しいもも作られ、全国に知られる特産品となっています。

## ゆがりのスポットに行ってみよう

### 白土松吉翁頌徳記念碑

所在地 那珂市福田4515

内容 この記念碑は旧那珂町役場前にあったものを一関ため池親水公園整備に伴い、移したものです。松吉の経歴や活躍の足跡を刻み、昭和31年(1956)に建てられました。



### おもな 参考文献

『郷土史にかがやく人びと』(青少年育成茨城県民会議・1971)

『20世紀茨城の群像』(茨城新聞社・1999)